



近世說美少年錄

初編
四



~ 13
3567
4



門 へ 13
號 3567
卷 4

近世説美少年録第一輯卷之四

東都 曲亭主人編次



密使茶店小貴翰を傳ふ
美婦子を携て情人を送る

登時若黨佐三次の錢下婚とて申乞巧亦うち對ひて。此れ塾臥們汝
ホグ大膽多。這道中列臥と人踏と物も去。鈍た伎倆の憎けれども
神詰の更さきとせせ。施行あらで取らぬ。檀那のゆゑか。口暗むる
受載をて退去と。空々く遞去まを受取る。霜避菰六冷笑ひつるを。七
鄙太よ踏む。膳三枚折れて。投膏茶代ハ鏝百文で。下りま。慳會身無慈
悲。吝吝面多。のほ檀那ハ寔のゆゑ。堪忍する。然のふと。問ハ鄙太ハ頭を
掉て菰公むと。とまのひを。世捨られる。俺們でも。膳三枚踏折られる。膏茶

早稲田 大學 図書館
昭和 34.6.3 燹
藏 書

代が、銀百も、金斬や、肋一枚、三十二文と知られり。野緒の胴鼓、黒箱の鹿骨でも、今時價が、何処かある返して、これと、聴かぬと、さるぬくと、臥多し、嘔く、然てと、猪弥次、卒八、鹹、声を、苛立、く、噫、流六が、心弱、さ、物、各、三、成、檀、那、あへ、寐、て、お、も、世、景、銭、百、で、人、の、骨、肉、を、買、れ、ん、然、る、を、受、取、る、と、あ、は、え、見、真、利、小、錫、言、欲、通、野、計、の、汚、面、奴、が、ま、さ、バ、濟、ぬ、と、濟、さ、ぬ、と、麴、桶、鼓、く、と、相、槌、の、調、子、外、は、の、高、搖、搦、菰、六、騷、が、ぞ、噫、味、や、り、借、と、按、ま、る、は、銀、百、を、と、口、あ、り、と、一、文、檀、那、百、人、の、貫、の、バ、都、合、ら、ぬ、這、一、緒、の、優、德、衆、徒、金、百、兩、も、當、ら、る、の、を、受、と、ま、を、何、と、せ、ん、菰、野、計、で、齡、役、多、し、小、女、才、の、あ、る、は、菰、野、太、よ、これ、堪、忍、せ、よ、愈、共、侶、不、和、解、ま、る、と、の、ひ、も、目、を、注、ま、れ、ば、氣、色、小、曉、得、る、卒、八、猪、弥、次、否、と、の、い、ぬ、陽、笑、と、誠、に、これ、い、れ、り、緯、と、分、る、哥、の、差、配、で、肋、骨、より、氣、が、折、れ、ら、ん、鄙、太、も、看、際、で、往、生、せ、よ、と、の、不、領、く、犬

蒲團新前より、去々、歳、ま、で、一、菰、も、寝、ま、れ、兄、弟、品、の、寛、解、る、恩、愛、平、等、血、を、り、け、風、を、あ、れ、恨、ま、る、い、ま、よ、ろ、く、宜、く、と、圓、く、治、る、麴、桶、の、は、ら、搦、げ、と、春、蠶、を、あ、笑、り、菰、六、を、佐、三、次、の、ち、對、ひ、く、目、今、皆、せ、ぬ、か、如、敵、も、が、町、人、百、姓、も、あ、ら、る、脆、く、折、れ、ま、れ、お、腰、は、怕、れ、形、の、ぞ、衆、徒、皆、納、得、仕、ア、ぬ、ま、と、あ、る、あ、ら、る、と、あ、ら、る、を、え、る、頼、十、郎、介、の、は、お、い、ぶ、る、亮、飲、と、同、を、果、ぬ、は、四、箇、の、乞、見、ホ、の、ぞ、う、い、ぬ、お、は、御、向、の、腹、の、卒、に、隨、ふ、ま、う、一、過、と、今、内、後、悔、免、さ、ぬ、め、と、途、巡、し、と、を、伏、ひ、く、玉、鉾、の、路、の、障、り、も、凍、解、ま、釋、て、温、と、死、夕、南、風、頭、痛、病、せ、折、込、も、あ、ら、る、自、ら、佐、三、次、も、疾、視、回、ら、い、ハ、ま、い、の、と、共、ま、立、意、氣、揚、々、と、ま、の、後、方、は、謀、添、ま、る、齊、一、急、ぐ、夕、向、暮、の、由、影、と、謀、添、四、箇、の、乞、見、の、流、の、下、に、隠、し、る、巨、刀、の、ひ、く、引、れ、故、く、声、を、お、け、後、より、竊、歩、し、追、獲、て、あ、い、せ、被、た、る、刃、の、電、光、不、意、を、撃、れ、佐、三、次、折、込、背、の、深、瘡、は、要、要、時、も

沿堪む苦と叫びて仆れる程もあらず見ホの頼十郎とて籠て競ひ搦
 る物ともせむ。あらるる身を論と左右近づく猪弥次と部太が刃をう
 落して怯むと透き玉項上捕え搦と投伏せ声ゆり立て汝ホを馬小似はも
 刃を隠し合ひさる前徑せんとする然らば人小頼れ後と問せも敢て菰
 六卒八昔年奴とも推し左ても右ても活て還さぬのせくらる引道は意
 趣の本未説示さ本は色仇笠屋阿夏の両箇の密夫一箇和郎が
 こそ物白の子さ産して今一人の財主小空笠前と喚く。送恨まの雲をそ
 憑れて扱昏間ら埋伏せしをまざるや今の浮世倒れ素人小施まを思の多
 うち受ても不ぬと調諛のふを二人齊一撃をまを戦世の習俗を市人莊
 客乞見ホも只殺伐を旨とて土一換ると喚れる兵法武藝を看做ふ
 悍らばりのめきれ頼十郎は又さる小問答の違ゆる刀を尻りと抜合へ踏

込々々戦小程小猪弥次部太も身起し來て落る刃を搦取り太も亦背後
 より撃んとする歩許る甲夜闇の倒臥する両箇の傷者にはまを撲地と跌た
 御音小佐三次折伏の忽地の呼吸通て刃を杖小立あがる主と援け猪弥次と部
 太と撃んと投締のづま隙るに奮撃の突戦入素れる七口の鐔音高く丁々
 發打と豆小鏢を削りたる勝負の回小佐三次は又卒八と戦ふをなす伏せ
 しかる身の深癩小眼眩して再撞と倒れる。問の折伏部太が肩矢斫下
 けく小の処へ懸く十々滅と刺をま程小部太の伏々刃を揚て折伏が
 乳の下刀尖ゆる鬣然と刺を刺れるも折伏の部太が胸前刺串たて此彼
 共の魂消る声と末期の一句ゆく臥累りと死にけり然程小頼十郎はも猪
 弥次の大疾を肩して倭僮く処を疊りけり細頸丁と較合落し返る方小菰六
 向脛拂て菰倒れ背後小頼九郎声を被破と研る刃外に頼十郎

修煉の大刀風掬ぎ去る。又郷九郎と戦ふ。一上二下、虚々實々、然も烈
 志、拳の牙、郷九郎の右腕、小髻の髪際、彼此と既、深痕を肩、難捷下
 と、あけん透、引脱し、足、信と逃走。郷九郎、脱さずと、及、刃を
 拭ひ、も、喘々、追、程、ゆ、く、この、ま、幾、ら、近、邊、の、里、人、ホ、ホ、ホ、棒、を、扱、き、蕉
 火を、振、照、し、群、々、と、走、り、來、り、郷、十、郎、と、押、首、を、縛、り、縛、の、始、末、を、語、問、小、声、罵、詈、を、と
 罵、聲、ぞ、く、頻、ふ、拍、擇、し、と、け、れ、郷、十、郎、の、逃、る、奴、を、ぞ、れ、を、狙、殺、せ、し、ま、す、本、人、を
 ら、ん、と、思、ふ、の、ら、ま、蛇、ひ、住、地、を、れ、の、邊、ホ、ホ、追、へ、う、も、あ、ま、引、提、り、カ、と、拭、ひ、劍、重、入、に
 這、條、の、絆、の、趣、如、此、々、々、と、音、よ、り、尾、を、詳、報、知、し、と、これ、の、管、領、家、の、御、内、人、陶
 瀬、十、郎、と、喚、ぶ、の、人、俱、一、なる、兩、箇、の、後、者、あり、一、箇、り、死、し、一、箇、も、亦、大、疾、に、生
 死、走、る、に、彼、悪、棍、頼、れ、る、四、箇、の、と、馬、ホ、の、討、首、を、い、は、し、死、ぶ、る、の、も、あ、は、
 誘、共、侶、を、先、の、立、く、舊、所、の、り、ま、る、る、片、息、を、菰、六、を、頂、撞、抗、を、披、扇

起、し、縛、の、機、密、を、責、問、小、菰、六、苦、痛、の、堪、む、と、郷、九、郎、頼、れ、る、伎、倆、城
 送、き、首、伏、し、郷、十、郎、ら、愛、を、企、む、悪、事、の、本、人、の、三、條、西、町、の、り、ま、る、る、池、澄
 屋、龜、六、と、う、い、ふ、の、後、兒、郷、九、郎、ホ、ホ、と、あ、ま、れ、者、奴、を、ぞ、れ、を、逃、亡、し、れ、と、既、深、痕、を
 肩、せ、し、追、捕、し、と、頼、れ、る、後、者、佐、三、次、幸、ひ、の、り、死、を、凍、あ、る、後、
 送、し、置、て、る、里、老、連、速、小、醫、療、加、へ、多、く、又、の、を、馬、の、死、せ、る、も、活、る、も、謀、之、の、沙
 汰、を、ち、ら、ひ、の、れ、の、君、所、に、立、又、く、と、あ、れ、の、よ、と、愛、を、あ、へ、し、里、人、の、中、西、三、箇、に、れ、と
 俱、中、管、領、家、の、ま、あ、る、と、し、と、訟、ま、す、と、檢、屍、の、使、を、あ、ら、ん、夜、の、深、夜、回、り、と、い、は、
 里、人、ホ、ホ、の、説、小、任、と、表、立、る、の、西、三、入、郷、十、郎、の、附、添、で、管、領、邸、に、送、
 れ、る、里、人、の、佐、三、次、が、あ、る、醫、師、と、招、れ、る、と、と、療、類、小、術、を、盡、し、け、り、然、程、小、管、領、大
 内、義、貞、主、の、陶、瀬、十、郎、與、房、と、千、本、の、里、人、ホ、ホ、の、夜、狂、の、訴、を、よ、り、と、言、の、虚
 実、を、問、質、し、先、則、家、臣、朱、野、丹、三、の、親、兵、を、隸、く、千、本、の、畛、遣、し、猶、且、親、兵、を、城

部のあつと悪事の本人おんわん鯉九郎いさくらうと捕捕とらとらるべし。と命めいせらる。却説くつて朱野丹あしのたに三時さんじと寝ねて
 宿所やどどと申まをす。千本せんぽんへ赴おもむく程ほど小彼こがれ処ところより十町じふちうありある。路みち傷やぶみ鮮あざ無な塗ぬれ
 臥ふしものあり引ひ起おこす。責せ問もんふ。夏なつ則すなは別人りたなるを。鯉九郎いさくらうをまげらるられ。夜よ索もとと被おす
 きて千本せんぽんへ登のぼり。里人さとびとホおり取とりて。里人さとびとと申まをす。徳とく島し瀨せ十郎じふじらう未なが宿やど
 る。趣おもむきと違ちがふ。今いままをまを見み荒あれ。深ふか瘡かさをまけ。地ちをまけ。と。の曉あけ々々息いき絶た
 たら。陶たうか若わ黨とう佐さ三さん次じも露る命めい危あやく。と。丹たん三さん則すなは里人さとびとの下した知し。後のちは技わざ業わざ一いめ
 折おひた。屍しかと共ともに瀨せ十郎じふじらうを宿やど所どへ遣やり。道みち小鯉こいさ九郎くわじらうと申まをす。里人さとびとをまげ。管くだり領りやう部ぶの
 来きり。次つぎの日ひ鯉い九郎くわじらうと申まをす。鞠まり問もんふ。小判せうぱん陳ちん下げ。在あり。下したの年とし未な陶たう瀨せ十郎じふじらうを恨うら
 む。且かつ小申こまをす。木き偶に人ひと。未な松しょう木き偶に人ひと。河か原げん人ひとの竹たけ屋や夏なつ良ら人ら。在あり。下したの
 六むか借かをかふ。今いままをまを小脚せうかく内うち人ひと。陶たう瀨せ十郎じふじらうの件けんの夏なつと密ひそ通つうと。産うる子この
 ら。この事こと誰たれとまりぬらるを。木き偶に人ひとの管くだり領りやう家けの威い福ふくは憚おどり阿あ容ようと

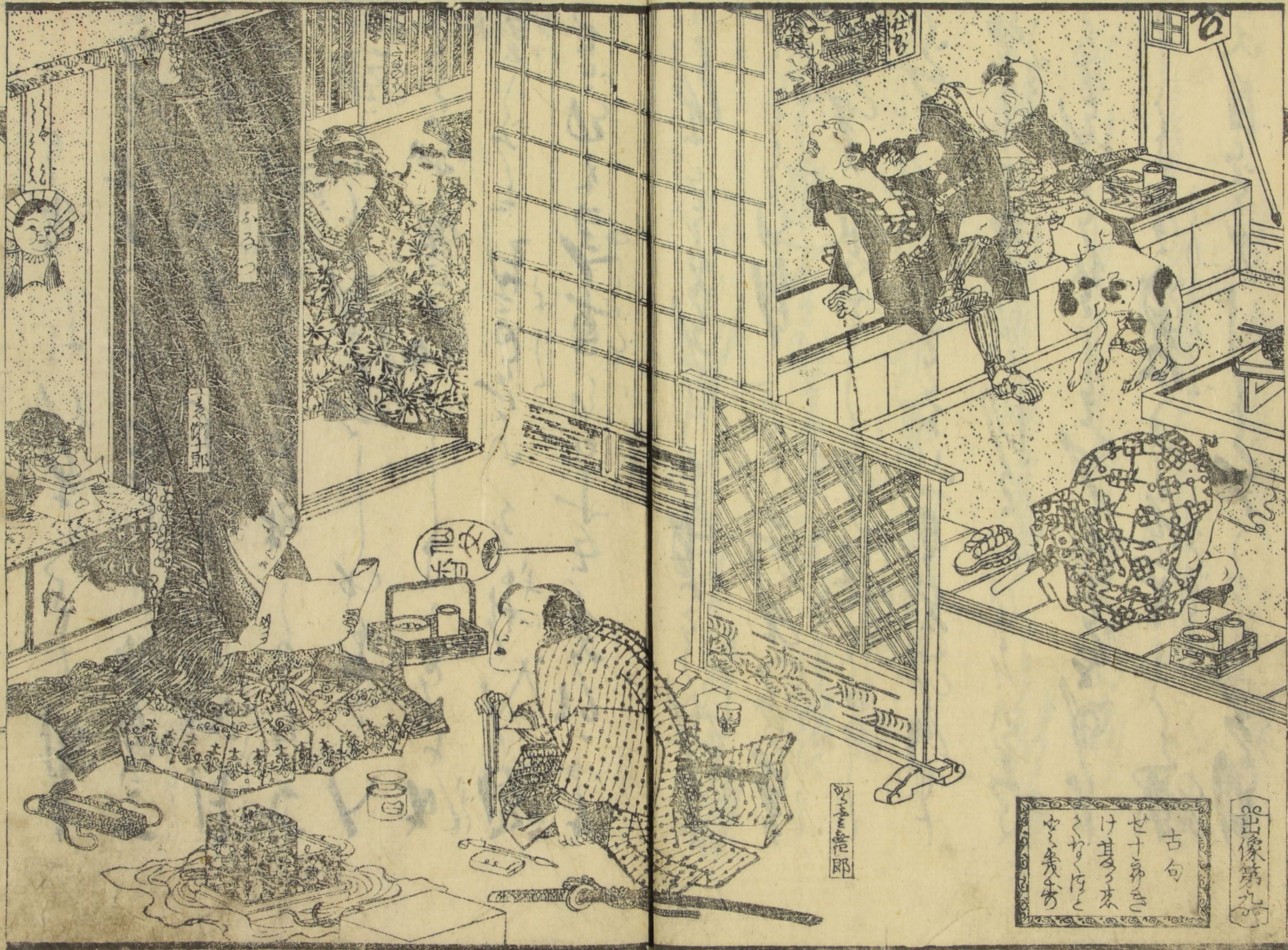
と。と。彼かとまりぬらる。と。朽くす。腹はらをまて。在あり。下した借かをかふの好この事こと。渠あれ。為なす。妻つま敵かた敵かたを
 ぬ。と。欲ほし。み。よ。む。力ちから及および。よ。四よ箇かんの毛け。馬うまをまり。頼たのみ。助すけ。剣けんをまり。と。
 れ。と。反あぐ。小こ敷敷果はて。在あり。下したの深ふか瘡かさをまけ。外とが情なさ由ゆひ。と。丹たん三
 冷ひや笑わらひ。借かをかふの好この事こと。と。良ら人ら。意い趣ずをまり。述のたまふ。人ひとの妻つま敵かた敵かた之の味あじ。是こ
 鳥とり侍しの癖くせ者ものと。叱なげ。小こ木き偶に人ひと。と。妻つま夏なつと。召よす。と。鯉い九郎くわじらうが陳ちん下げ。癖くせ
 云いと。詳こま説せ示し。この。故ゆゑホお覚しや。ある。と。問とふ。小こ木き偶に人ひとの頭かぶをまり。握にぎり。と。ま。り。と。
 上うの陶たう瀨せ十郎じふじらうの者もの。在あり。下したの。此これ。をまり。知し。と。鯉い九郎くわじらうが云いと。と。ま。り。と。
 あり。と。丹たん三さん領りやうをまり。今いままをまを夏なつの。と。問とふ。阿あ夏なつの阿あ容よう。と。色いろをまり。問
 せ。と。ま。り。と。濡ぬれ。衣きをまり。と。と。ま。り。と。人ひとの虚うつ言げん。と。小この阿あ容よう。と。四よ輪りん。と。前まへ
 比ひ鯉い九郎くわじらうが女をと。と。ま。り。と。口くち説せ。と。と。度たび毎ごと小こ寄よる。情なさけ。と。ま。り。と。物ものをまり
 程ほど小鯉こいさ九郎くわじらうの。身みの。り。と。ま。り。と。タたけ。親おやをまり。小こ助すけ。當あたり。と。ま。り。と。京きやう師し

是れを以て然るを以て免されて吸えられて幾日もあらぬ何を證す云云
 直と好し一層殺むる物狂ひ事あらんぞらん。あはれ福鬼のいづくも星をれくはる
 願ひの察しあうと心く傷の牽居られる。卿九郎とてえま。證據をけれ悪
 棍もと非と争ひる。頭を低く跪居り。登時丹之声高き。それ卿九郎
 竹の方狀壁言ひ夏の不誼ありと。汝が妻あはる。非法の働た言語同断況や
 不誼の證據を。さればそれ木偶の瀬十郎を知らむと。あまの情慾致
 治遂さうけん送恨のよりと谷まのものを証する。これ龜六を召よ。て年来汝
 放蕩無頼の趣さ。不定なる知まら。今飽ま。小歐懲む。いふく実を吐くべ。死
 こそ彼奴と歐む。と烈に指揮。小雜兵。小の美ら。と立。あて。卿九郎を推伏
 せ。女を揚。昔の皮肉の破。追。小歐。果。果。在。下。四。輪。前
 より。阿夏。小舊。た。怨。あり。乃。者。人。の。噂。より。て。津。心。の。変。す。一。瀬。十。郎。殿。と

情由ある故と。報する者のあり。あ。恨の累。中。方。も。先。彼。人。を。聞
 敵。小。後。阿。夏。を。殺。え。と。計。較。し。現。疎。忽。の。術。の。後。相。違。ひ。を。さ。う
 ぬ。首。伏。さ。り。け。り。丹。之。次。と。介。と。陶。瀬。十。郎。が。り。ゆ。夏。中。亦。罪。の。一。
 人の噂を聞き。と。音。領。家。の。御。内。人。を。殺。せ。んと。大。膽。不。敵。の。罪。を。輕。く
 木。偶。及。夏。中。本。を。里。人。も。命。の。意。を。よ。と。と。嚴。に。告。え。さ。う。身。に
 暇。を。と。せ。り。卿。九。郎。の。獄。舎。小。敷。き。あ。の。日。の。廳。の。果。け。り。有。右。而。朱。野
 丹。之。次。卿。九。郎。が。首。伏。の。夏。の。顛。末。云。云。と。主。君。義。貞。を。告。え。あ。て。そ。の。誹。謔。を。讀。み
 一。如。義。貞。勃。然。と。大。怒。り。と。然。り。と。の。卿。九。郎。の。此。も。借。味。死。罪。疾。速。に。梟
 首。と。都。下。の。悪。俗。を。懲。ま。下。と。敦。圍。す。け。下。知。せ。り。丹。之。次。の。日。卿。九
 郎。首。を。刎。て。懸。く。河。原。小。梟。け。り。然。程。小。陶。瀬。十。郎。の。懸。の。千。本。の。里。人。亦。と
 共。侶。小。卿。九。郎。が。悪。事。の。よ。と。告。を。あ。は。し。の。夜。より。さ。を。告。め。り。け。む。も。藻。深。

まむ虫のこれらうと。よか憚りの園を置り宿所は籠り居る程は若黨條野
 佐三次の刀瘡終に愈むと。黄泉の客とるのまけり有右而五十日なり。歴る程の
 年肆月の初旬より。有一日朱野丹三の主君の使を奉りて瀬十郎を宿所
 請来て君命を傳る。陶瀬十郎真房事當家第一の老黨なる政屋を
 ありて行状とらざる風聞あり。山口へ返り遣る。帰著の後も御沙汰あり
 まむ位と慎まざるべしと。嚴命せざる瀬十郎は幸ひ罪無九郎をりし歸りて
 阿夏がのの出するにれと身骨ある術心す。一解くをりもる。大くおそれて言兼
 あり猛旅の準備と。次の日京師をたち出る。後者も格と者多し。西三
 人か過ぎりけり。かれが浪速の浦邊より水行を周防へ急ぐ。その日巳の比及
 深草の里を過る程に京家の侍とむす。後者も一箇の後者をもて茶店よ
 尻と拭き。今瀬十郎が過る言を。遠く後者もある。途のしりく。

瀬十郎と留めさせ。竊小對面せし。けし。要時立ちとせめ。とむせける。瀬十
 郎の訝しく思ひ。さし。隨小馳く茶店小近づく。と。それの侍は是則別
 人。さし。野西中納言。野顯卿の近習の青侍。幸路无四郎。寧成と喚れ
 た。年来相識る。と。これ。思ひ。けし。と。さし。且。且。恥。恥。床。几。の。傷。ま。あ。り
 けし。送。小。寒。暖。と。述。さ。る。祝。祝。さ。る。た。も。面。面。瀬。十。郎。の。言。を。密。め。て。某。の。口
 づら。の。ひ。ひ。越。度。ま。よ。り。て。月。ろ。無。能。で。ゆ。い。か。這。回。周。防。へ。追。返。さ。る。か。う。慌。た。旅
 る。れ。の。猛。の。首。途。也。餘。日。も。多。く。四。稔。以。來。親。懇。命。を。兼。り。一。方。さ。る。小。お。辭。別。の。暇。も
 あ。ら。な。い。心。さ。し。ひ。ひ。小。圖。ら。ば。も。の。処。で。安。兄。と。對。面。し。る。と。月。來。本。意。小。稱。へ。し。再
 顯。卿。の。い。ひ。ま。ま。さ。し。さ。し。さ。し。安。兄。の。又。何。木。の。所。以。さ。ら。と。律。細。さ。る。小。お。ん
 稻。荷。へ。詰。の。ひ。一。致。と。問。へ。无。四。郎。も。亦。声。を。低。め。て。某。が。け。あ。ま。あ。つ。つ。主。君。の。使。を
 奉。り。て。安。公。も。あ。ん。る。の。と。宣。君。并。小。買。房。卿。の。お。消。息。も。亦。聞。し。た。る。と。あ。く。と



美山坐鏡第一轉

十箱轉

出像第九

古句
せし第
け其
くわ
空

出像第九

美山坐鏡

美山坐鏡

美山坐鏡

美山坐鏡

あまのふ端近う。誘ひきてと母屋小入りて障子の陰小坐とられ。瀬十郎の推
 辞ひよる。とほほと。對ひて。登時元四郎が。その春も文公の災難。實
 君も買房卿の折れ。聞せ。ひて。駭死大。と。余后も左右。何月安ら
 ぶ。ま。ま。龍居のよ。は。左京北。憚。故意不安。を。詔。既。斯
 日。経。文公。周防の山口。返。され。起行の。風声。も。中。途。に。出
 如此。と。竊。ひ。了。意。を。奉。君命。を。奉。侯。と。久。只。寡
 君。の。萬里。小路。賢房卿。の。使。を。立。仰。合。され。け。れ。も。又。入。數
 人の。視。立。女。の。え。と。寡。君。を。禁。め。彼。卿。の。消。息。を。某。に
 齎。り。酒。あ。ゆ。と。翰。匣。より。二。通。の。書。信。筒。を。り。と。瀬。十。郎。の。受。戴
 ぬ。と。折。死。る。と。賢。頭。卿。の。買。房。卿。も。共。小。名。残。を。惜。し。め。愛。顧。の。筆。に
 題。れる。中。に。賢。頭。卿。の。消。息。は。今。よ。四。檢。前。の。比。緑。野。亭。に。空。待。せ。し。る。

のみらるる。その。花。を。折。れ。と。ぬ。る。り。術。を。悔。い。れ。今。は。恨。を
 ら。れ。せん。鏡。す。め。り。と。書。せ。る。を。それ。顔。且。赧。る。り。せ。ぬ。ぬ。ぬ。と。さ。さ。さ。と。い。い
 や。く。巻。て。懐。ふ。うち。斂。め。今。の。ち。め。ぬ。雨。脚。の。あ。情。を。辱。れ。前。路。と。急。ぐ。旅。る。れ。が
 おん。合。書。と。なる。違。も。あ。不。敬。と。ん。さ。せ。る。ん。や。只。是。貴。所。の。執。成。を。頼。ま。さ。る。の。に
 了。と。い。ひ。も。ち。あ。さ。ま。ま。を。元。四。郎。靈。時。と。推。察。め。く。さ。も。儲。ふ。あ。ぬ。と。君。命。を。依
 して。と。と。赤。刺。を。偏。提。あり。一。支。盛。薦。を。袂。に。分。元。然。も。目。る。は。肆。月。の。旅。の。い。を
 正。ら。と。慰。め。後。者。の。推。考。を。偏。提。を。ひ。く。薦。め。瀬。十。郎。の。感。謝。の。堪。え。れ
 彼。共。下。戸。る。ね。は。い。の。さ。さ。る。不。意。の。數。思。も。覚。ぬ。ま。暗。譚。時。と。想。た。瀬。十
 郎。の。浄。い。の。立。て。天。井。を。遠。り。の。奥。ま。り。の。縁。頬。の。到。り。遠。く。も。程。は。忽。地。背
 後。の。人。あり。と。あ。や。嗚。と。呼。笛。を。誰。る。ら。と。さ。さ。れ。ぬ。出。ひ。は。る。元。夏。阿。夏。の。珠。之。奴。を
 携。て。あ。の。中。候。る。登。時。阿。夏。の。邊。く。瀬。十。郎。を。掖。留。り。涙。さ。し。と。声。い。て。後

多く喃瀬十郎ぬ。御九郎が大膽多。の圍敷多。のつれより。あんきのうのさあ。あつた。の
 わんといひ。ひびく。安ん心の。あつた。に。幸ひ。めく。出平。も。多。く。飲。甲斐。も。多。く。木。を。た。ち。り。受。
 ね。あ。つ。た。中。の。末。の。沿。邊。を。榜。繩。の。ま。た。別。れ。ま。う。あ。つ。た。の。い。ひ。を。と。よ。と。泣。沈。ゆ。る。瀬。十。
 郎。も。嗟。嘆。し。と。あ。つ。た。も。草。の。あ。つ。た。の。誠。心。を。憎。し。と。の。あ。つ。た。の。な。と。親。を。母。の。若。丸。に。
 愆。過。世。を。結。び。悪。縁。の。り。の。も。あ。つ。た。の。断。ら。れ。ん。や。公。廳。は。は。脱。れ。て。世。の。風。声。を。
 ひび。せ。ん。主。君。の。御。れ。色。耳。に。と。猛。周。防。へ。還。さ。せ。る。も。と。よ。と。情。由。の。あ。つ。た。の。風。声。
 あ。つ。た。の。と。え。今。亦。あ。つ。た。の。別。を。惜。し。泣。口。説。ふ。り。の。罪。を。増。す。の。も。情。に。
 似。て。情。の。あ。つ。た。の。人。視。の。被。ら。ぬ。同。の。背。門。より。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 ち。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 今。朝。と。宿。所。を。出。る。と。釋。田。を。推。か。る。女。の。歩。は。果。敢。

言。て。御。向。小。大。の。里。す。く。來。つ。折。認。ら。れ。も。あ。つ。た。認。り。て。ゆる。西。さ。る。の。御。内。人。辛。
 踏。折。の。あ。つ。た。茶。店。の。想。せ。ぬ。ま。ゆ。れ。遭。は。り。竊。小。よ。と。詠。ね。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 言。毎。の。露。と。汲。み。今。や。隠。ま。す。隠。ま。れ。立。女。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 ち。と。告。り。小。辛。踏。ぬ。の。宣。ひ。を。小。辛。と。も。つ。れ。共。侶。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 多。振。あ。つ。た。に。似。く。人。の。批。評。と。脱。れ。け。ん。を。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 これ。の。知。ら。ぬ。あ。つ。た。ち。と。外。小。を。え。め。と。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 ま。で。強。固。く。宣。ひ。を。と。も。山。海。十。里。を。隔。て。又。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 そ。の。誦。め。く。は。れ。も。珠。之。女。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 この。見。の。顔。と。あ。つ。た。の。容。止。似。ま。す。肖。る。や。え。ぬ。と。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 こ。り。出。し。て。照。し。て。あ。つ。た。の。推。向。け。て。珠。上。と。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。
 る。珠。之。女。も。争。ひ。く。死。血。脈。の。因。愛。父。を。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。あ。つ。た。の。

藤原載方瀬十郎歎けをあれ目小腕に淚飲露の一滴辭はるゝ脇挿の
刀子附る小刀子と遠く抜とて珠之成が右の甲と左の甲に推並
小刀子の一寸許壓割小破れは歎とる珠之成は彼共の甲に出して
ある鮮血と瀬十郎の信とを寔や親子の兆徴中を鮮血分れを因るよ古実を
ある銚一を疑ひの稍解れとて見とられぬ見の久後名告あ目のありも
若只叔侄といふのまされ年長百送れとてそれともうらみ時再會の符契
這多の疵小傳のあり金銀珠玉得が死化貝と像見とる及も喪ひ易る
といひけく墨斗の墨と指小塗で珠之成が右の疵と左の疵小損入まへ首一
字の假黒字と鮮明小ええけり有右而右瀬十郎の腰著の財惠裏より圓
金十兩とり出してこれを阿夏に遞与しとてやうふらふも似ぎ細小丸も珠
之成と養育の為取り取り寸志とてとる遠く立まくまると校留る阿

夏の節とちりりきく辭とけりるおん教諭久後憑り再會の符契はれ子の
東西を稍辨ん比ふとて説示さんとていひはき遣は左の右の疵とていひ
ゆふ月夜に支くられまら近まらとて花より腕に別はけり長旅旅宿の
旦々の食物もあらを一つて恙もあらは彼地より音耗せとていねと推乃は
袂を振拂へ絞けり腋著の糸の糸糸のるを以捨てを瀬十郎を外
面におびとる辛踏ぬ心とも中座の失散ありいひ既小時刻の程り
ゆめめ金と納めといふ光四郎あら現りまも各残の場よれ古語ゆも
送君千里須一別といひ強る要るなるべとて心く偏提とて飲め極
後者と叫立しく茶價を茶博士ま取らせるとその間小瀬十郎も後
者と叫聚しく光四郎別を告御留めもせしとて西脚の御懇命の身を
終るまでとるる西帰の日は卑札をとりてあ合せり上向是是より幾

あつた安兄も弥執袴の為の自愛あへと述べて刀を引提て立あぐを先四郎も亦幾
 條の口誼を舒て目送る程阿夏の隔亮とすて用ておもひや外を返す敷に深
 草の涙秋露の珠之ぬるを掖立てを立在るを一期の別と知るやあつたあ
 雲と流はく水の定をわたり人さあぐの江湖上あ一世の夫婦ありとりどもあつた百
 年の情人なり備人情どりのあつたあ女親郎才憐むべし亦公道とと論
 せむとぞ非徳乱行人あぐ人あも似むとりのあつたあの噫嘻

第七回 二賊剪徑して父女を屠る 一妻羞と忍く両難言は後よ

再説卿九郎が親よりけし三條西町の庖丁酒賈池澄屋龜六も憎しとて獨
 子に後れりける哀傷悲泣の亦あつたあ現卿九郎が短慮は計恨
 むあ死人を怨もて可惜命を限せしる自業自得とひるる初を推す借なき

阿夏より夏起りてこれいそわれ世の風聞ゆも彼陶生と情由ありしと卿九郎が婿
 く多ひて罪と贖ら身を殺して獨没ゆりまると人合ひの虚説あり恨めしの淫婦
 や形もつら身やといわれと胸あ燃る火のあせまれば折み觸て木偶成と追まをせと
 思ふものつれより就任負さども常あ変りく債ると苛刻く阿夏と面を對しても眼
 詰り辭を被けむ胡越の思ひとあつたあ木偶成が愚會多る事情をくもあつたあ
 と人の噂を洩しやう瀬十郎が言の趣今も半信半疑とそれ欲とあつたあ
 りのあつたああつたあ彼美男子の故やあつたあ周防の山口へつたあと告ぐる人け
 あつたああつたあ後安くも母屋のあつたあ龜六が若猛り氣色立て疎々し
 愉々たる況や口の祥さうける人の噂の耳の障りも京師小住も果あつたあ鎌倉
 京の芳らぬ敏恭奉の都會さうりも彼地も亦兵火の荒て且兩管領山内家と
 扇谷殿と睦みあつたあ贖伊豆相摸る北條殿と戦ひ年々あ絶えもあつたあ今

昔の鎌倉の如くもあつたれども然とも生活の便著るといふに彼地の程り
 住むるべし又佳事の多うなればと又起り云々と阿夏も告ぐ相譚ひを阿夏も
 必すうよや京師に住居るともあつたものとて瀬十郎ぬも遠くといふものあり世
 間舅姑の味を他郷に授け人改りて多く後を去ると尋思する一議も及ばずも
 多くを思ひ給ふこと準備もあつたよ木偶が飲びて家材雜具の送るも活却しく
 盤纏とやら行装を整へるその日借金を龜六に返して四隣合壁を別を告今茲九
 つ、才のさける小夏と云ふ才のさける珠之次と肩のゆりあるせも夫婦父子まで四人の
 年捌月の下流小東と投て起行り東海道への春より処々を戦ひ絶え新関も
 亦まうりと豫て宿をさるるれ岐山路をよめれとこの日七八里の路を辿り守山に
 驛小宿を投りぬて第三日の未の比磨鍼山巔を越えとま然ても折々行装を
 女兒小夏も多と掖扶けて珠之次を背負する夫婦が辛苦のいふもあつた急と

果敢と山路の人の往還稀なる下晡小るる隨ち茅萱小條原を取らぬ
 声も高峰小近づ程をあれ一叢最敏な樹植の間より顯れ生る両箇の癖者
 身長五尺七寸一箇の六尺中も及ぶ一蓬頭巾小胴金作の巨刀腰小苛めたるか
 打扮の回もあつた彼張樊が侍るらるる関の太郎が子孫あると思ふも僻目小あつ
 たり當下両箇の癖者の先後小立塞りく研小響音く声を鳴り立をれ行客
 騒がせるせも又寡の知れず盤纏身皮骨折甲斐のあつたと又と杉枯比の酒
 價もさるる拾元東西のあつたと脱と左右方齊一刀を果れと引抜は吐
 嗟と叫ぶ女房女兒と共に魂銷る木偶の歯牙も合は戦慄れく背青ら脱
 多と抗て喜曼山の高家君達やと俺們的京師を世渡る楫が廻らね世帯果登
 倉卒廻國路費といふゆへ懐財限の進せん衣裳の免しと賂は
 腰と搔撈りて稍とらふと連婚銭を両箇の賊のさるるもせで眼と睜らす声



阿夏

木偶小

木偶小
果て二賊
阿夏

小のり

かむつ

かむつ



阿夏

出像第十

かむつ

出像第十

かむつ

立ち賊ハ駭怖れ泣入るる小足を同搔く珠之成と目上高き揚て
 やよ是女これを名よ俺們両箇の脚あるの後下と父の詞も語も用らば今この
 餓饑を谷底へ小女良とあるト土なせんを思案せ切替て俺們さあの内を
 後の親も子も魚肉で美飯の年中安樂否故成致と左右より邪慳で口
 説く小児を質種回報せどろぐ存亡の境と身へ口隱る母の歎と子の叫び
 冥夫の呵責磨滅の名の肩けん劍の山紅蓮の涙焦熱の湯とあるまじ
 しくよりも夏阿夏の裏く骨を鎮めく涙の淵は思やう今然と述て争ふとも
 両箇の雙言を敷くものあり又後小親も子も殺されて何の益りあらんか
 ぞそれのくもあれ偶舉けし男児の珠之成と恙もある年長成人の後に怨
 復たよすがもあらん歌辭伎のよまも常盤前の子の仇小後ひ一例もあるを
 のぞつれさるりの思慮るうらばや。這身ひとと両箇の男小任を宿遊

女ものも一ゆるた取れども時の要あり鼻も刺り身は只今この山路を殺され
 むれと思ひる何れ獸小とのあはれ呼余ると吐裡小尋思と涙を飲めて彼
 方此方の両箇の賊をうち向上又ええと喃刀袷遠く景趣せりあは谷底
 一投は腰れの継子ゆくその穢児の血をとりうら身勝ぬあはねども地を走
 り獸天鹿が鳥の子も多迷ひぬのあはや今よりしてその穢児を養ふてあは
 るふれこころ背くは命を助けぬとあは然る兩箇の山賊を珠之成を扛卸
 きてはさくと頭を捨り背拵を遠く阿夏の遊とて圓る目を細くあは合
 笑と通怜憫た女房も路傍の苦背門の柳靡なき損のさるのれは今より
 去く俺們を慰めてのらふこの子の俺們両箇の兒親ものぞ疎ふせんやあは
 われとも機を緩さして脱走らんと謀るあはとや虚と肌を寛いがかの向
 哩と當り知るその腰の中十両あり且その金を預けりとのひは航く左

右より引出し長財囊の珠之女の為と頼十郎の脱せし置土産
 る金もれども夫も深く隠してとて来しものを惜まるといふれは阿容も々
 と取られて惜しはふえらるるの亦せん樹のまわりり。却謀両箇の山賊の本偶々行李と
 衣裳を取て肩ふらち被阿夏親子とて立て何処とて伴の程も幾もあて只
 暮るるの地の總く山又山の羊腸の知道と辿るも一維葛又松柏枝まて
 樹下弥闇く嵩石道小横りと推路言の滑る。仰て蒼天を瞻れ閃々星の
 光も夜風の秋既深る。俯て山河を渡ると消々る水の音小壺折ら裳且濡ん
 と本邦の大江山唐土の白猿傳鬼魅妖怪捉られる良家の婦女子もめくあり
 けん。累阿夏は難とて岩根の身を倚せ樹幹の携るごとく動もされ後と一
 箇の賊の食と食り腰を推て杖掖れ又一箇の賊の珠之女を扛抱て声をけ氣
 換へ左右小慰めり初めり若如之程の時移りて天の光明るは比は這両賊が

巢穴の来り登時阿夏の彼此と頭を叩て家の光景を素木の柱の
 檐月の漏る宿のわら素言は何人住捨らん道場は菴室なり庵の
 水引た坐席の庭を言とて天然の風景の家具調度とゆら夜物を綴
 羅と竭せの何地の豪家の所蔵るけん大約その為体彼金山の洞欵とあへ亦
 支黨あるを膽吹の鬼の宿るを袴無保輔の隠宅の似るも然程
 件の二賊の阿夏珠之女と勦も奥まりる処小休せ早飯を炊きとて
 管待も抑る山賊の一箇の十々鬼夜行太と喚れ一箇の野干王黒三と喚れ
 初の肥後の飯田山を川角頭太連盈も下りて小連盈のゆも永正六生
 春の比備中又弘元捕捕れて支黨もさる討滅されり。この夜行太
 と黒三の辛く討ちの鋒頭を殺脱て遠く近江路落弟坂田郡佛生山の奥
 深く巢穴を占く三稔以来ある然る這地方の磨鍼中山善谷佛生と連

山波濤の如く聳立て樵夫も到らぬ峻嶺なる。住人とのる山鳥路熊徑嗟
峨とて音つらもの松ふく風伴々の白雲の外中尉むよまのむる有石而
夜行太黒三のまなく街頭お出で行者を前経しり又あると路里固く入る民屋と掠
奪まらう浮は雲の富を欲しと跡が采草と美をみる残忍悲恋の癖者さるを
住は深山の人家遠く出沒定らるるこれを知らぬものりけり既あき夜行
太木の阿夏多信傳まらぬ美女さるものとゆく教じまうその素生と語らぬ勢ひ
低地るれ阿夏の隠れとては京師の歌妓のりけりとて明々地小報のり
二箇の賊の商量しと次の日向の里あつて筑紫琴平三弦るごとを竊とるこの両
種を阿夏小授けて鼓せり歌せると時を酒の敵とす只この途程のり
三箇の宿所よとらぬ日阿夏と夜行太が妻あり又夜行太ととらぬ黒三が
妻あもき盛言が是の両箇の天の孤牝を愛するに相似る浅まらぬものりけり
有敷さうら見のいと惜けれ阿夏これと推辞はよと逃去らんと欲せ
とも夜行太と黒三と送代は宿所おされはるる便りなむとてや此の途程のり
とも山深くまき道遠き何方を人家ある処とて豫てまらぬ救ひまの出路
迷ふ程もまき追詰られ引戻さるるともあつてうの三珠之双命の保ちぬ
畜生のあもあつて山賊のまらぬ良人の宛書言る二人の為の身を潰され
調戲ののちまらぬ抑甚慮る悪業を好むぬ夫でもぬもまらぬ政道
おけて瀬十郎ぬいと浅うら契し罪の報ひ來るは地獄の隨たる世ま薄命
る女まらぬとてあつてあつてや過來ぬ胸のまらぬ秋の山牝悲鹿
恨く離色ぬらむ暮暮葎蔓子に羈され捨せり身は果を世訪人絶く
るのり畢竟阿夏が這窮死の後の話説のりけり七次の巻よ解分と聴ねり

近世説美少年録第一輯卷之四終

美少年録第一輯卷之四終 千

Blank page with faint bleed-through from the reverse side.

Page with faint bleed-through text and a vertical grey smudge. The bleed-through text is illegible but appears to be organized in columns.

Vertical text on the right edge of the page, likely a page number or title. The characters are partially obscured by the binding.

Vertical text on the right edge of the page, likely a page number or title. The characters are partially obscured by the binding.

